

言葉を科学する：人間の再発見

Day 11 ちょっとだけ feedback

・私は科学というのは法則を見つけることが大事なのではなく、法則を見つけたら「なぜその法則が生まれるのか」「なぜそうなるのか」という理由を解明することが重要なことのように思います。でも、これまでの授業では理由の部分についてはあまり触れられてこなかったような気がします。言語学においては、あまり重要ではないのですか？

***素晴らしい質問です。短く答えると、この授業で紹介しているタイプの言語学は「なぜ」を追求する研究分野です。さらに興味のある人は、この「ちょっとだけ feedback」の一番最後を見てください。**

・狼に育てられた少女について。

***何人かの人がかれまでも、この話題を挙げていましたが、この話はでっち上げであることが分かっています。興味深いのは、作り話だと分かっているのに、この話が今でも信じられている原因は何かということです。（都市伝説？）鈴木光太郎『オオカミ少女はいなかった』（新曜社）**

=====

・Q：言語学も、近代科学の方法を用いて研究すればそれは「科学」だ、という考え方には共感できる。しかし、実体のない「言語」を実体のある何かの研究と同じ名称で呼ぶことには未だに、もやもやとした印象がのこる。

***19世紀の後半になっても、原子は実体のないものという認識が根強くありました。マッハはある科学者の集まりで「私は原子の存在を信じない」と明言したことが知られています。言語を「E言語」ではなく、この授業でいう「I言語」（人の頭の中にある言葉を操る生物学的な資質）と考えれば、（その正確な正体はまだまだ不明な部分が多いですが）「実体」があるものとも考えることもできると思われます。**

・Q：言語は生得的に得られるのは本当だろうか。だとしたら、他の分野でもいきなり九九をいえるような子が存在してもいいのではないだろうか？

***興味深い質問ですね。いきなり九九を言える子供はいないですし、いきなり日本語やスペイン語を話し始める子供もいません。生得的な能力が発現するためには自然言語が話されている環境が必要です。人間の数学的能力に関しても、ある面に関しては生得的であるという説もあるようです。（ただしこれは、学校の教科としての「数学」の成績が良いかどうかということとは無関係）**

・Q：理系の研究では、実験を失敗した結果、偶然新しい発見が得られることが多い気がするが、言語学においてはそういったものはないのだろうか？

***さまざまな試行錯誤を行っているという点では同じと考えられますね。その時点で最善と考えられていた仮説が、偶然気が付いた小さな言語現象をきっかけに、大きく変わることとは何度も起こっていると思います。**

・Q：なぜ、ことばを科学することは、もっと昔から行われてこなかったのか？

*** 人間の言語能力が、日常的にはあまりにもあたりまえなので、そのすごさ・不思議さになかなか気が付かなかったということがまず大きいでしょう。（ニュートンが現れるまで、重力の存在に誰も気が付かなかったのと同じ）。**

・Q：万有引力であったり、遺伝の法則は、これから先もおそらく変わらないものだと予想されるが、言語はある言語がなくなってしまったり、また新しい表現などが生まれたりするかもしれないので、全てを科学と比較するのは難しいと思った。

*** ここで言っている言語は、「E 言語」のことですね。これはこれまでもこれからも変わっていくでしょう。しかし、この授業で問題としているのは、人間が生物として生得的に持っている頭の中の資質の1つ（「I 言語」のこと）です。これは、人間が生物として進化上大きく変わらない限り、変わらないのではないかと考えられています。ホモサピエンスの誕生以来、人類の遺伝的資質はほとんど変わっていないとすれば、今後、短い間にも大きく変わることは予測できませんね。おそらく「I 言語」も人類誕生以来、本質的な部分はほとんど変わっていないという考え方もあります。**

・Q：先生は何で、研究しているのですか？先生は理論言語学の研究は役に立つと思っていますか？先生がいま言語学研究をされている動機も知りたいです。

*** あまり私のことを話してもしょうがないのですが、きっかけは、このようなタイプの研究があるということを知って、とても興味を持った（大学院生の頃）ということでしょうか。それからは、やればやるほど（このようなタイプの言語学がやろうとしていることが本当に理解できるようになるにつれて）強烈な興味を持つようになりました。人間とは生物学的にどのような存在なのかを明らかにしようとする壮大なプロジェクト。「役に立つ」と思っているかどうか、ということに関しては、この授業の最終回に私の考えを少しお話しする予定です。**

・Q：自然科学は明確な答えが、求まることが多いと思いますが、自然科学としての言語学において、何か明確な答えが見つかった例はありますか？

*** 難しい質問ですね。何を「明確な答え」とするかにもよりますが、このようなタイプの言語学でも、ある仮説がかなり合理的に確からしいと認められる、ということが何度も起こっています。ただし、それもさらに研究が進み、修正されたり、別の仮説にとってかわられたりということが続いています。他の自然科学の分野と同じですね。現時点での大きな違いを挙げるとすれば、データの測定の方法論や技術の精度は、他の近代科学に比べて、現在の言語学は著しく貧弱です。したがって、ある有望な仮説があっても、それをかなりの精度で正しいと検証する、あるいは誤りであると反証するというのは、物理や化学ほど簡単には白黒をつけられないということも少なくありません。それだからこそ、理論言語学者は物理学者よりも賢くなければならない、とよく言われます。**

・Q：言語の仕組みが今後数十年後に解明できるのは十分に期待できるのでしょうか？言語の解明に時間がかかり、言語学に抽象的な点が多いのは、倫理的な理由で実験がしにくいからなののでしょうか？

*** 倫理上の問題が、他の生物学の研究よりも大きいことは確かです。(哺乳類の記憶の研究や免疫機構の研究はマウスでもできますが、人間の言語能力は人間にしかないので、同様の実験で得られる情報には限界がありますね)。抽象的な点が、他の自然科学と比べて多いかどうかは簡単には言えないように思います。素粒子物理学の理論は、ものすごく抽象的です。どの科学もこのタイプの言語学も同じですが、何かは解明できて、はいこれで終わり、ということはありません。何かは明らかになれば、そこからまたいくつもの新しい疑問や問題が出てきます。つまり、その分野の研究対象（ここでは「I 言語」）に関して、現在よりも理解が深まる、ということの積み重ねが、いつまでも続く、ということです。**

<以下、質問ではありませんが、宿題に対して、とてもよいコメントがたくさんあったので、いくつか紹介します>

・自分のこれまでの人生の中で、勉強について「これが将来いったいなんの役に立つのか？」ということは幾度となくあった。自分のことだけについて言えば、本当の意味での興味や好奇心を対象となる学習内容に抱いていなかったことが、そのような問いを感じた大きな原因だという気がする。

・自分が興味を持っているものに関しては、それが役に立つのかどうかなど、考えもしないのに、興味がない、あるいは不得意だがやらなければならないようなものに関しては、いったい何の役に立つのか、と考えてしまいます。

*** これは卓見ですね。宇宙の神秘や太陽系の誕生などに興味のある人は、「はやぶさ2」の打ち上げに何の違和感も覚えませんが、そのようなことに何の興味もない人は、なんでこんなことにたくさんのお金や人材をつぎ込んでいるのか、と文句を言っていますね。この授業で取り上げているタイプの言語学（人の頭の中の言語能力を明らかにする研究）に最初から強い興味を持っている人は、「役に立つのか？」という質問など考えもしなかったようです。**

・今回のテキストを読んで、知的な面や認知面に障害を持つ人の言語に興味をもった。特に自閉症の人は、独特のイントネーションを持っており、くだけた言い方や方言などは話さない（文法は正確だと思う）という印象があるが、言語座になんらかの問題があるのだろうかと思った。

・言語獲得の過程を調べるのには個人差があり決定的な証拠を掴むのは難しいとあったが、化学の分野でも普遍的な真理がありながら、目に見えている状態には物質によって異なることは多分にある。化学では個体差と一般化するというシステムがあるから抽象的原理にたどりつけているのかなと思う。そういう点では言語学の未熟さを感じてしまう。しかし、未熟だからこそ、今後も発展性が望める学問なのかもしれない。

・私には一回りはなれた弟がいて彼が幼いころ言葉を覚えてもらうために、物を見せながら単語を発音していた。しかし、視覚的要因が言語獲得に影響しないことを知ってがっかりした。自分の努力が無駄であったと思うと悲しいです。

*** 1月の授業でも具体的に論じますが、普通に言葉が話されている自然な環境で育てば、母**

語は獲得できます。意識的に何かを「教える」必要はありません。しかし、大きいお兄ちゃんが、一生懸命相手をしてくれた、という経験は弟さんの情緒や家族兄弟への思いなど、さまざまな発達に良い影響を与えたことは間違いのないと思います。決して、無駄な努力ではなかったと思いますよ。

<「実用性」に関する意見、いくつか>

・個人の趣味ならいいが、公の資金や施設を利用して行っている以上、何らかの実用性のことを考えない研究は、プロの研究とはいえないのではないか。実用性のない（あるいはいつ実用性が出てくるか分からないような）好奇心だけで行う研究は、現代社会では許されるものではないのでは？

・仕事・研究というものは、本来自分の特性を活かせる場であり、本人にとって楽しい場でなければならないと思う。「知りたい！」とい探究心で仕事・研究をすることは悪いことだとは思えない。働くことではなく、働くことによって生まれる利益（給料や便利になる社会）で満足することが、はたして良いことなのか、誰にも決められないと思う。

・一見、自己満足に思えるような研究にも、将来を切り拓く（今までになかった概念を作る）可能性があるのだと考えると、実用性のない研究というのは、ないのかなと思いました。

<「理系」「文系」という区別について>

・「私は理系なので」「僕は文系なので」ということに関して、その区別をはっきりさせるのは難しいのだなと思いました。もちろん、いわゆる理系的な人と文系的な人はいると思いますが、完全にどちらかである人はそんなにいないだろうと思いました。

・研究にはさまざまな方向がある。研究というと理系という認識が多くの人々の頭にあり、分野ごとにこれは理系、あれは文系と勝手に区別しがちである。しかし、今日の授業で研究の中身を詳しく知らずこのように分けるのはいけないなと思った。

<自然科学としての言語学はより深い説明を目指しています：興味のある人だけ読んで>

[先生の告白]：この授業は、「専門家による非専門授業」という位置づけですので、私の研究分野である理論言語学の技術的専門的な話はほとんどしていません。どの分野でも同じですが、ある程度その分野の専門的なトレーニングを受け勉強をしなければ、テクニカルな話は理解できません。この授業では、そのような専門のトレーニングを受けていなくても、理解でき興味を持ってもらえる範囲で話をしようと努めています。しかし、中には「言語学は見つけた法則に対して、「なぜそうなるのか」の説明を追求しないのか」という非常に重要な質問をしてくれる受講生もいて、北大生の意識の高さにうれしくなります。

1980年代くらいまでは、さまざまな規則や原理を明らかにしていくという研究が主でした（そのおかげで、20世紀前半とは比べ物にならないほど、人間の言語能力の仕組みが明らかになってきた）。しかしそのような原理や法則の姿が多少見えてきた1990年代の終わりころから、そのような原理や法則に関して「なぜ」を追求する研究が少しずつはじまって、現在に至っています（「ミニマリスト・プログラム」という大きな企てです）。（興味のある人は、さらに自分で調べてみてください！）